

日本におけるロッシーニ自筆資料の所蔵

Gli autografi rossiniani conservati in Giappone [a cura di Akira Mizutani]

水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』(日本ロッシーニ協会紀要)第35号(2015年1月発行)の拙稿「日本におけるロッシーニ自筆資料の所蔵」(21~36頁)。筆者所蔵のロッシーニ夫妻の書簡については別途日本ロッシーニ協会ホームページに掲載済みですが、これは他の所蔵に関する基本情報とマヌエル・ガルシアのロンドン・デビューに関する書簡を含めた紀要原稿をPDF版にして掲載します(版型はB5版のまま。頁番号を1~16に変更し、誤植などを一部修正)。(2015年12月)

はじめに

ロッシーニ自筆の楽譜や書簡等の一次資料の大半は、ヨーロッパ諸国(作曲者の祖国イタリアとフランス、ベルギー、イギリス、ドイツなど周辺各国)とアメリカ合衆国の資料館、音楽院図書館、個人コレクションに所蔵されているが、一部はロシアや日本を含む非西欧諸国にも存在する。日本では複数の音楽資料館(旧・南葵音楽文庫、民音音楽博物館、国立音楽大学附属図書館、武蔵野音楽大学図書館)と筆者コレクションが主な所蔵で、判明しているだけで2ダースにのぼり、アジア地域で最も豊富なロッシーニ原資料保存となっている。その多くは筆者も協力した1995年フィリップ・ゴセット教授の来日調査とその後の情報提供を通じてロッシーニ財団も把握しており、真贋に関する問題も解決済みとなっているが、新たに判明した所蔵で未報告のものもある。本稿では、現在筆者が把握している日本のロッシーニ自筆資料の概略を明らかにしたい。¹

I. 音楽資料館と音楽大学付属図書館の所蔵

南葵音楽文庫 (Nanki Music Library – Tokyo) 註: 1977年以後、読売日本交響楽団に帰属継承。²

- ・ロッシーニ自筆署名入り書簡 アーサー・セガン宛、1827年10月28日付
Lettera firmata; ad Arthur Seguin (Londra), da Paris, 28 ottobre 1827.

ロンドンのキングズ劇場の秘書アーサー・セガン(Arthur Seguin, 1781-1865)宛の書簡。パリの王立劇場の新監督となったエミール・ローラン(Émile Laurent)がロンドンの劇場に折衝に行くので情報を提供してほしいと依頼する内容。署名のみロッシーニ自筆で、文面が王立イタリア劇場支配人カルロ・セヴェリーニ(Carlo Severini, 1793-1838)の筆跡であることは、ロッシーニ財団の『書簡とドキュメント』第3巻(2000年)で明らかにされた³。

付記: 南葵音楽文庫は1970年の同文庫英文蔵書目録『Catalogue of rare books and notes / The Ohki Collection, Nanki Music Library』において《エジプトのモゼ》二重唱の声楽パートのロッシーニ自筆2頁を所蔵としたが、1995年の前記ゴセット鑑定により、ロッシーニの自筆ではなく不詳の第三者のカデンツァ例と判明した⁴。それゆえ同文庫のロッシーニ自筆所蔵は、書簡1点となる。

民音音楽博物館 (Min-On Music Library – Tokyo)

- ¹ 1995年のフィリップ・ゴセット教授による調査結果を含む概要は、拙稿「日本におけるロッシーニ自筆資料」(『ロッシニアーナ』日本ロッシーニ協会紀要、第3号、1996年所収)で明らかにした。本稿はその後明らかになった所蔵を加えた新版で、個々の記述を簡略にした。
- ² 南葵音楽文庫は1977年以後、読売日本交響楽団に帰属し、1999年までマイクロフィルムによる閲覧が国立音楽大学図書館で続いた。2006年に慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構による貴重手稿資料の高精細デジタル画像収録が開始され、公開が始まっている。
- ³ *Gioachino Rossini, Lettere e documenti, vol. III* (a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni) Fondazione Rossini, Pesaro, 2000., pp. 293-294.
- ⁴ 詳細はロッシーニ全集《エジプトのモゼ》校註書131-132頁を参照されたい——*Gioachino Rossini Mosè in Egitto, Commento critico*, Fondazione Rossini, Pesaro, 2000., pp. 131-132.

- ・ロッシェニ自筆書簡 ドニゼッティ宛、1845年4月26日付
Lettera autografa firmata; a Gaetano Donizetti, 24 aprile 1845.

ガエターノ・ドニゼッティにトロンボーン奏者を紹介する書簡。2011年1月1日～7月3日、民音音楽博物館「輝けるロマン派の作曲家たち、リスト生誕200年展」で展示（筆者未見）。

国立音楽大学附属図書館 (Kunitachi College of Music Library – Tokyo)

- ・ロッシェニ自筆楽譜 二重唱曲《雷雨と晴天》(二声のバルカロール。1830年頃)
Autografo; *Orage et beau temps Barcarolle a deux voix* (Paroles de A. Bétourné) s.l.,s.d. [1830c]

1830年頃パリで作曲された二重唱曲（編成：テノール、バス、ピアノ）。フランス語テキストはアンブロワーズ・ベトゥルネ (Ambroise Bétourné, 1795-1838) 作詞。《ギョーム・テル》アルノール役を創唱したテノール歌手アドルフ・ヌリ (Adolphe Nourrit, 1802-39) とヴァルテル役を創唱したバス歌手ニコラ＝プロスペル・ルヴァスール (Nicolas-Prosper Levasseur, 1791-1871) の二人に献呈された。

フィリップ・ゴセット作成のロッシェニ作品目録第2版 (1977年) で自筆楽譜がロンドンの個人蔵とされたが、その後売却され、2006年に国立音楽大学附属図書館の所蔵が明らかになった。冒頭頁の複製と筆者による解説は、『国立音楽大学附属図書館所蔵 貴重書解題目録』(2007年) 44-45頁に掲載。

武蔵野音楽大学図書館 (Biblioteca Musashino Academia Musicae – Tokyo)

- ・ロッシェニ自筆署名入り文書 (1824年1月14日付。歌手ジュゼッペ・ブラッチとキングズ劇場の契約書)
Contratto di Kings Theatre per Giuseppe Placci; 14 gennaio 1824. (firmata da Rossini come testimone)

武蔵野音楽大学図書館の稀観書蔵書目録『Litterae Rarae Liber Primus 稀観書目録』(1962年、非売品) にロッシェニ署名入り書簡と記載されているが、書簡ではなくキングズ劇場の興行師ベネッリ (Giovanni Battista Benelli) 作成の文書であることが『書簡とドキュメント』第2巻 (ロッシェニ財団、1996年) で明らかにされた⁵。これはバス歌手ジュゼッペ・ブラッチ (Giuseppe Placci, ?-?) が200リーヴルでプリモ・ブッフオとしてロンドンのキングズ劇場に出演することを記した契約書で、ロンドン滞在中のロッシェニが証人として署名している。

付記：前記『稀観書蔵書目録』には《エジプトのモゼ》のスケッチ (Mosè: Preghiera, 《Skizze per Viol. u. Klav.》) 所蔵と記されているが、1995年のゴセット鑑定により、ロッシェニの自筆ではなくロッシェニの作品でもないと判明した。それゆえ同図書館のロッシェニ自筆所蔵は、自筆署名入り文書1点となる。

II. 個人蔵

水谷彰良コレクション (Collezione privata di Akira Mizutani – Tokyo)

<http://societarossiniana.jp/rossiniletters.html>

- ・ロッシェニ自筆署名入り書簡 (?) 伯爵夫人宛、1824年9月10日付
Lettera firmata; a Madame La comtesse [? Cur-] (s.l.[Paris]), da Paris, 10 settembre 1824.
- ・ロッシェニ自筆署名入り書簡 サウロ氏宛、1826年10月13日付
Lettera firmata; a M.Sauro di "Moniteur" (s.l.[Paris]), da Paris, 13 ottobre 1826.

⁵ Gioachino Rossini, *Lettere e documenti*, vol.II (a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni) Fondazione Rossini, Pesaro, 1996., pp.222-223, n.6. (ロッシェニ書簡ではないため註6に内容が転記されている)

- ロッシーニ自筆書簡 アンドレーア・チブリアーノ・ゲディーニ宛、1838年2月3日付
Lettera autografa firmata; ad Andrea Cipriano Ghedini (Bologna), da Milano, 3 febbraio 1838.
- ロッシーニ自筆書簡 ジュゼッペ・ヴァーリア宛、1846年2月14日付
Lettera autografa firmata; a Giuseppe Valia (Teramo), da Bologna, 14 febbraio 1846.
- ロッシーニ自筆書簡 フィリッポ・サントカーレ宛、1856年11月4日付
Lettera autografa firmata; a Filippo Santocanale (Palermo), da Paris, 4 novembre 1856.
- ロッシーニ自筆書簡 フェルディナンド・リッチ宛、1859年1月16日付
Lettera autografa firmata; a Ferdinando Ricci (Lugo), da Paris, 16 gennaio 1859.
- ロッシーニ自筆書簡 スティーヴンス氏宛、1860年8月24日付
Lettera autografa firmata; a Mr. Stevens (s.l.), da Passy, 24 agosto 1860.
- ロッシーニ自筆署名入り書簡 (? 判読不明) 宛、1861年4月20日付
Lettera firmata; a “Mon cher et célèbre ami” (s.l.) da Paris, 20 aprile 1861.
- ロッシーニ自筆書簡 [ユリウス・] ベネディクト宛、1866年5月6日付
Lettera autografa firmata; a [Julius] Benedict (London) da Paris, 6 maggio 1866.
- ロッシーニ自筆書簡 ジュゼッペ [・マッテーイ] 伯爵宛、1866年8月1日付
Lettera autografa firmata; a [Conte Giuseppe Mattei] (s.l.[Bologna]) da Passy, 1 agosto 1866.

筆者の個人コレクション。1991年の時点でロッシーニ書簡7点を所蔵していたが、ロッシーニ財団による系統的調査と『書簡とドキュメント』刊行開始(1992年)に伴い蒐集を中止し、その後は散逸の可能性があるものや個人研究に必要なアイテムのみを入手(その結果、過去10年間のロッシーニ書簡の追加所蔵は3点にとどまる)。

付記: ロッシーニ財団への情報提供とは別に、ロッシーニの妻オランプ・ペリシエを含む所蔵目録を2001年に『ロッシーニアーナ』(日本ロッシーニ協会紀要)第19号に掲載した。その後入手した3点を含むデジタル複製全11点(ロッシーニ書簡10点とオランプ・ペリシエ1点)は、2014年11月から順次日本ロッシーニ協会ホームページに公開している⁶。なお、他の作曲家と歌手の自筆書簡所蔵についても同ホームページにその複製を公開したい。

以上が2014年12月末の時点で把握している日本におけるロッシーニ自筆資料のすべてである(自筆楽譜1点、書簡12点、文書1点)。このうちデジタル複製がネット公開されているのは筆者所蔵のみだが、旧・南葵音楽文庫所蔵の書簡も公開のための準備が進められている。これとは別に、所蔵が特定されないロッシーニ自筆書簡1点(詳細不明)と、1992年12月にロンドンのオークションで落札されたロッシーニ自筆スケッチ(五つの装飾句のバッセージ。日付と場所の記載なし)も日本に存在する可能性がある。しかし、どちらも所蔵が確認されなければ外国への転売や消失の可能性もあるため国内所蔵と認定しえない。

文化庁による日本の音楽団体への貴重資料所蔵調査もすでに始まっているが、探索の手が個人にまで及ぶとは考え難く、研究者を対象に申告制度を設けないかぎり完全な情報の把握は困難であろう。個々の作曲家の専門研究者は一次資料の現存の有無に関する情報を持ち、また海外の音楽財団の協力者となっているケースもあるので、これを視野に入れた調査が不可欠と思われる。さらに国内古書店やオークションで重要な一次資料が販売・競売されるケースがあり、散逸を防ぐためにもしかるべき団体や公的機関による購入が望まれる。

⁶ <http://societarossiniana.jp/rossiniletters.html> (複製とコメントは個々の日付のクリックで閲覧可能)

ロッシーニの自筆書簡（複製と解説。水谷彰良コレクションより）

Lettera di Gioachino Rossini ed Olympe Pellisier [dalla Collezione privata di Akira Mizutani – Tokyo]

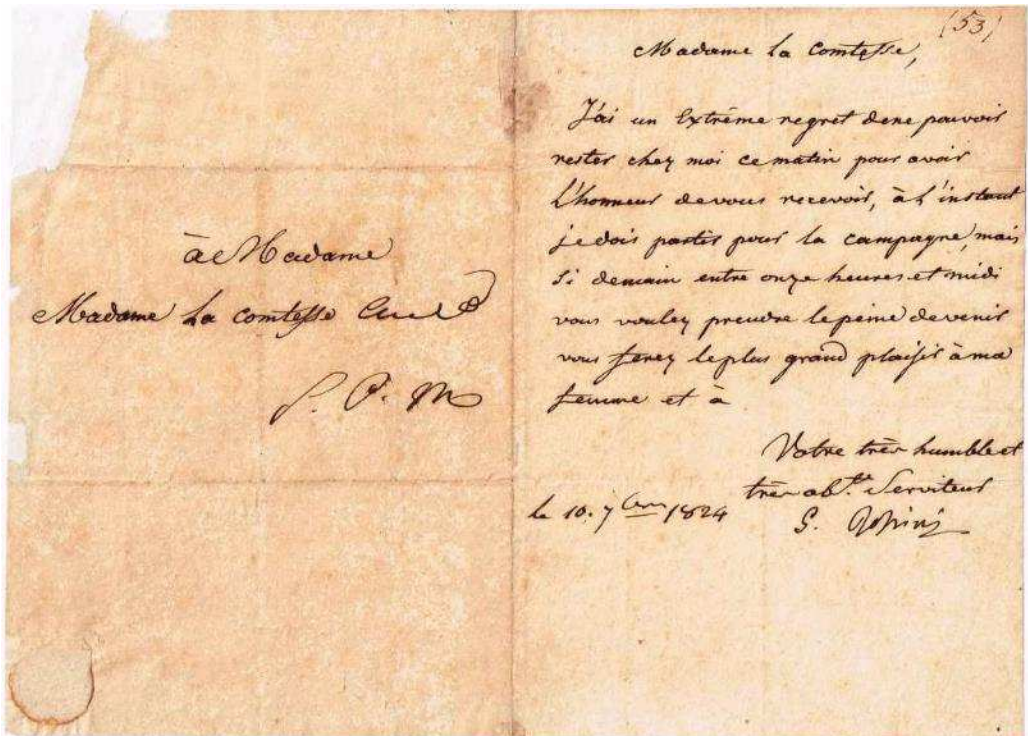
ロッシーニの署名入り書簡 [?]伯爵夫人宛、1824年9月10日付

解説

ロッシーニ最初のパリ訪問は1823年11月9日、ロンドンに向かう旅の途上であった。12月7日まで約1カ月のパリ滞在を経てイギリスに渡り、12月13日から翌1824年7月26日まで7ヶ月間ロンドンに滞在、国王ジョージ4世に寵愛された。そしてイタリアに戻る途上8月1日に再度パリに足を踏み入れ、9月12日に帰国の途に就く。1824年9月10日の日付を持つこの自筆署名入り書簡は帰国のためパリを発つ2日前に書かれたが、『書簡とドキュメント』に掲載されたその間のロッシーニ書簡は父に宛てた2通(第3a巻「両親への手紙」所収のコルブランの手紙1824年8月2日付に記したロッシーニの追伸と8月30日付のロッシーニ書簡)のみであることから、これが現存を確認しうる3通目の手紙となる。

当時ロッシーニはフランス語を解さなかったので、フランス人への手紙は第三者に代筆させ、署名のみ自筆で書き添えた。この手紙もロッシーニの真筆は署名のみで、宛名と文面の代筆者を特定しえない。宛名の判読が難しく、CまたはCuで始まると判るだけなので、[?]伯爵夫人としておく。用紙サイズは17.5×24.2cm、開封の際に剥離した蠟印部分は補修されている。

文面は、伯爵夫人から訪問の打診があったことに対して明日の昼前に訪ねてくれるよう答え、「今朝拙宅であなたにすぐお目にかかる栄に浴することができず、私はとても残念です。私は田舎に発たねばなりません、もしもあなたが明日の11時と正午の間に私を訪ねる労をおとりいただければ、私の妻[と私]にとってこの上ない喜びです」とある。



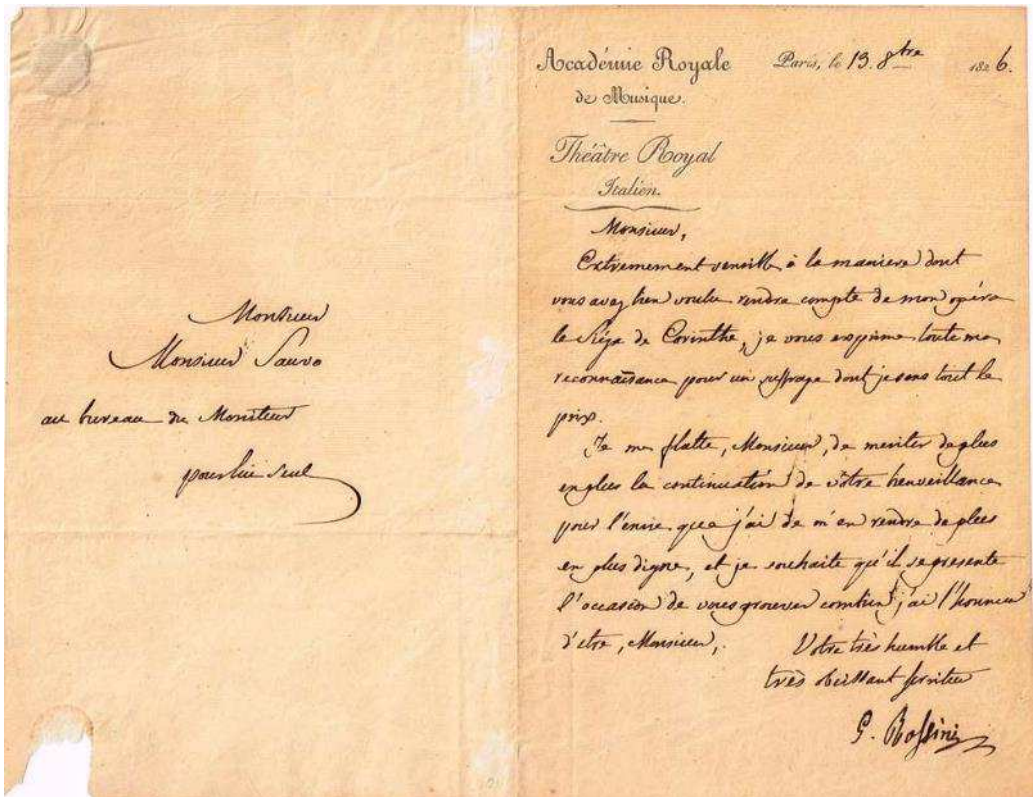
A Madame La comtesse [? Cu...], Lettera firmata di Gioachino Rossini [Paris]
le 10^{bre} 1824. [Collezione privata di Akira Mizutani – Tokyo]

ロッシーニの署名入り書簡 『ル・モントゥール』紙のサウロ氏宛、1826年10月19日付

解説

1826年10月19日の日付を持つロッシーニの自筆署名入り書簡。『書簡とドキュメント』第3巻 N.672 に再録されている (pp.11-12)。

ロッシーニはその10日前の10月9日、パリのオペラ座 (王立音楽アカデミー劇場 [サル・ル・ベルティエ]) で《コリントスの包囲》を初演した。翌11日の新聞『ル・モントゥール (*Le Moniteur*)』に掲載された長文の初演批評で作品が絶賛され、その後の評価にも良い影響を与えたことから、ロッシーニは評者サウロ (Sauro 註:フルネーム不詳。変名と思われる) にこの感謝の手紙を送った。用紙に王立音楽アカデミー劇場と王立イタリア劇場の共通便箋を使用し、署名以外の宛名と文面はその筆跡から王立イタリア劇場支配人カルロ・セヴェリーニ (Carlo Severini, 1793-1838) と認定されている。用紙サイズは 20.2×25.8 cm、開封の際に蝋印部分が剥離している (左下隅)。文面は、サウロが《コリントスの包囲》を評価してくれたことに感謝し、「あなたのご厚情に値するようますます精進します」と述べている。



A Monsieur Sauro., Lettera firmata di Gioachino Rossini [Paris] 19^{bre} 1826.
[Collezione privata di Akira Mizutani - Tokyo]

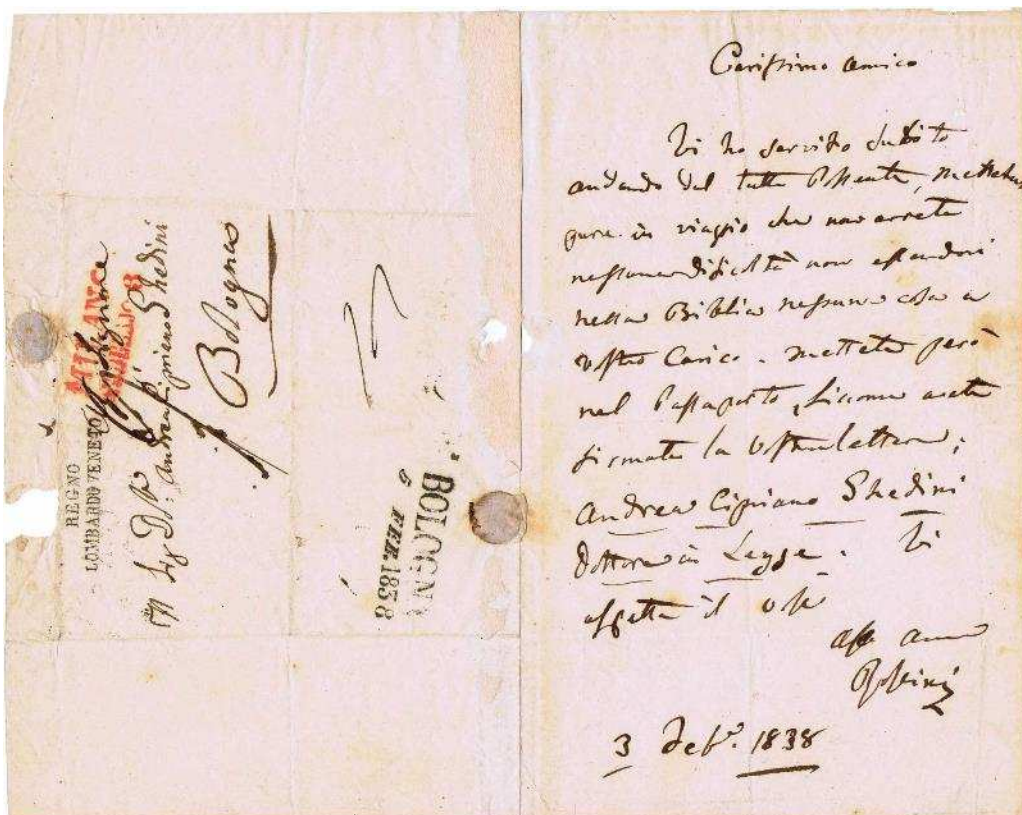
ロッシーニの自筆書簡 アンドレーア・チプリアーノ・ゲディーニ宛、1838年2月3日付

解説

ボローニャ在住の弁護士アンドレーア・チプリアーノ・ゲディーニ (Andrea Cipriano Ghedini, 1788-1875) に宛て、1838年2月3日にミラーノで書かれたロッシーニ自筆書簡。19日前の1月

15 日にパリのイタリア劇場が焼失し、この建物に居住していたロッシーニの親友で同劇場支配人セヴェリーニが死を遂げたことと関連する手紙の一つで、当時愛人オランプ・ペリシエと共にミラーノに滞在していたロッシーニはこの事件に衝撃を受け、すぐにもパリに戻りたかったが、さまざまな事情でそれをできずにいた。

ボローニャの弁護士ゲディーニはロッシーニの友人でセヴェリーニと親交があり、ロッシーニはパスポートと一緒にゲディーニの手紙を添えるよう求め、ゲディーニの自筆で「アンドレア・チプリアーノ・ゲディーニ、法学博士」と署名するよう下線を付して強調している。用紙サイズは 21.3×26.8 cm。2 月 3 日に大急ぎで書いて発送し、宛名の左にミラーノとロンバルド＝ヴェネト王国の消印、右に 1838 年 2 月 5 日のボローニャの消印が押されている。



Ad Andrea Cipriano Ghedini., Lettera autografa firmata di Gioachino Rossini
[Milano] 3 Feb.° 1838. [Collezione privata di Akira Mizutani - Tokyo]

ロッシーニの自筆書簡 テーラモのジュゼッペ・ヴァーリア宛、1846 年 2 月 14 日付

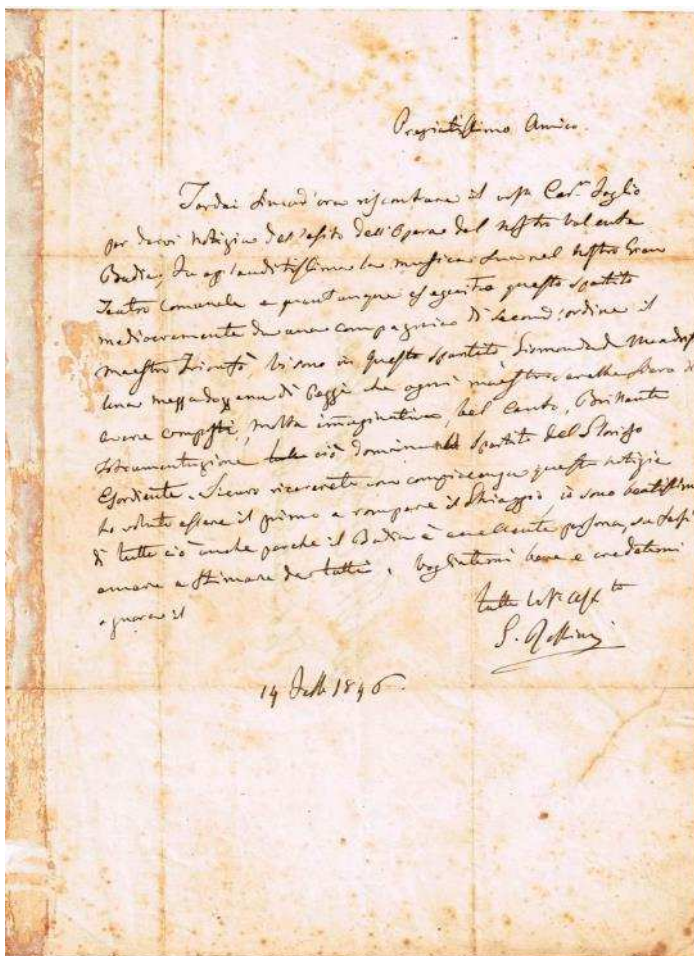
解説

これは写しの一部が誤って 1847 年のものとして文献で引用され、オリジナルの所在が不明だった書簡である。正しい日付は 1846 年 2 月 14 日、用紙サイズは 27×20 cm、宛名は裏面に書かれている。同年 2 月 10 日にボローニャのコムナーレ劇場で初演された新人作曲家ルイージ・バディーア (Luigi Badia, 1819-99) のデビュー作《メンドリージオのジスモンダ (Gismonda di Mendrisio)》(3 幕のトラジェディア・リーリカ) の成功を、テーラモのアブルツォ・ウルテリオール・プリーモの行政長官ジュゼッペ・ヴァーリア (Giuseppe Valia, 1844-48 年在職) に報告する書簡で、バディーアの父はその部下とされる。

ルイージ・パディーアはテラモで生まれ、ナポリの王立音楽学校でジンガレリに師事した。その後、教師メルカダンテと折り合いが悪く1840年にナポリを去り、ローマを経てテラモに帰郷、同地の劇場で指揮者として活動するかたわら最初のオペラ《メンドリージョのジスモンダ》を作曲した。これがボローニャで初演された経緯は不明だが、前記テラモの行政長官の求めでロッシーニが後援した可能性があり、この手紙の中で二流のマエストロの凡庸な歌手団による演奏ながら「大成功」を収めたと報告し、「楽曲の半ダースはこれを作曲したどんなマエストロも誇りとするもので、豊かな想像力、ベル・カント、輝かしい管弦楽法のすべてが栄光ある新人の楽譜の中を支配しています」と称賛している。ロッシーニは「ベル・カント」の語を今日的な意味で最初に用いた一人として知られるが、この手紙のそれが最初の使用と思われ、その意味でも貴重な書簡である。



裏面(宛名)



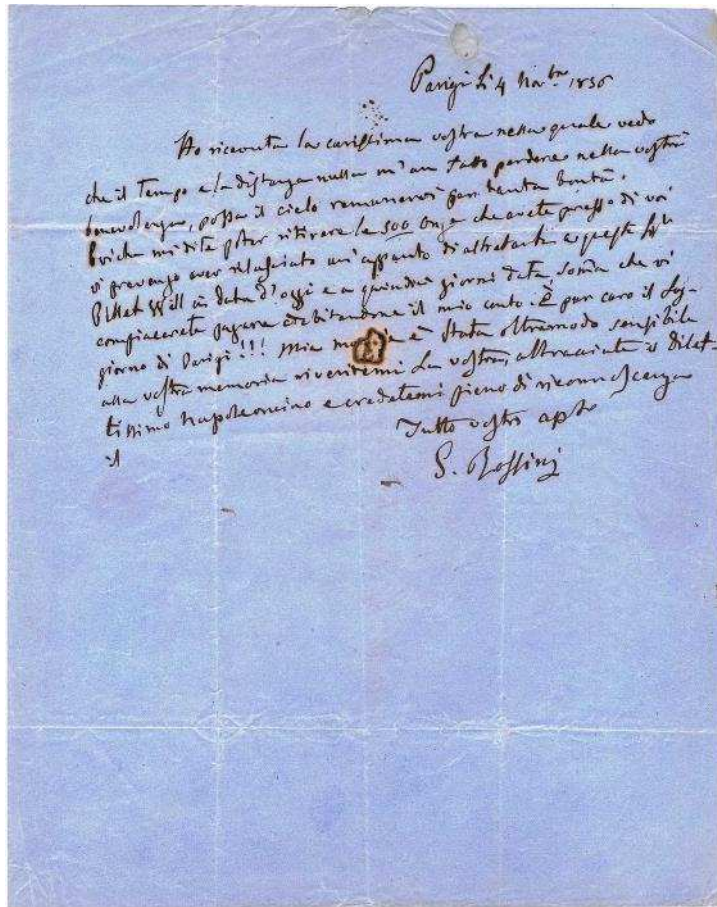
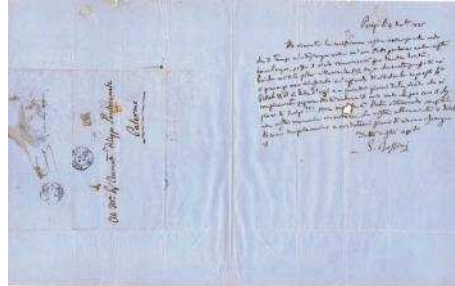
A Giuseppe Valia (Intendente di Teramo)., Lettera autografa firmata di Gioachino Rossini [Bologna] 14 Febb 1846. [Collezione privata di Akira Mizutani – Tokyo]

ロッシーニの自筆書簡 パレルモの弁護士フィリッポ・サントカーレ宛、1856年11月4日付

解説

パリに移ったロッシーニは1856年6月にストラズブルを訪問して大歓迎を受け、続いてドイツのバート・ヴィルドバートで療養した。8月初旬にバート・キッシンゲンに移って療養し、続いてバーデンの温泉めぐりをして10月6日にパリに戻った。ロッシーニは同月23日、ボローニャのエージェント、アンジェロ・ミニャーニ宛の手紙に、「私は絶えず自分の神経症と闘っています、ドイツで自分の中に何かを得たようです。どんな風に冬を過ごせるか様子を見ましよう!! パリ滞在は実に快適ですが、出費の多さは耐え難いほどです」と書いている。

その12日後の11月4日に書かれたこの手紙は、旧友のパレルモの弁護士フィリッポ・サントカーレ (Filippo Santocanale, 1798-1884) からの手紙への返信で、あなたが求めた金額をピエ=ヴィル伯爵を通じて本日から15日以内に私の口座から支払うと記し、「パリ滞在は高くつきます!!!」と書き添えている。青色の用紙を使い、サイズは42×26.5cmと大きく、左の宛名にパリとマルセイユの消印が押されている。本文は下から3行目に焼け焦げがあるが、そこが「私の妻」の「妻 (moglie)」に当たるのは偶然としても面白い。

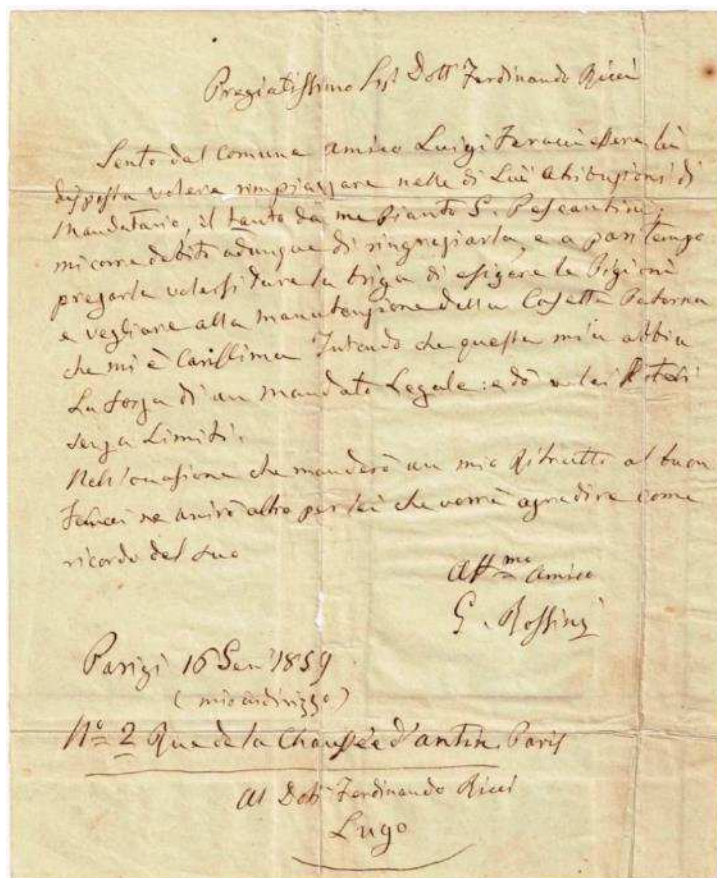


A Filippo Santocanale (Avvocato di Palermo), Lettera autografa firmata di Gioachino Rossini Parigi li 4 No. bre 1856. [Collezione privata di Akira Mizutani - Tokyo]

ロッシーニの自筆書簡 ルーゴの弁護士フェルディナンド・リッチ宛、1859年1月16日付

解説

ロッシーニが受け継いだ父ジュゼッペのルーゴの家への愛着を示す手紙の一つで、ロッシーニはフィレンツェ移住後にボローニャの住居と資産、パリ移住後にフィレンツェの住居と資産をすべて売却しながらも、ルーゴの家だけは手放そうとしなかった。これはその家の維持管理に必要な全権をルーゴの弁護士フェルディナンド・リッチ (Ferdinando Ricci) に与えるとした書簡である。用紙サイズは23×19 cm。



A Ferdinando Ricci (Avvocato di Lugo)., Lettera autografa firmata di Gioachino Rossini Parigi, 16 Gen 1859. [Collezione privata di Akira Mizutani -Tokyo]

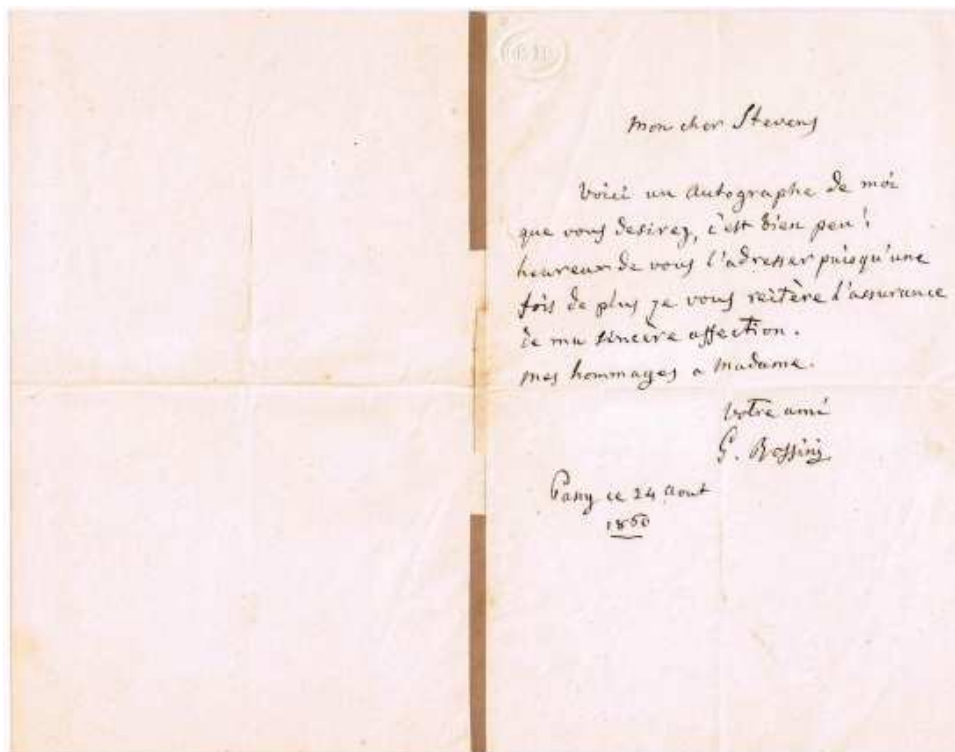
ロッシーニの自筆書簡 スティーヴンス宛、1860年8月24日付

解説

パリ定住を決意したロッシーニがパリ市からパシーの約1万平方メートルの広大な土地を購入したのは1858年9月、邸宅は1860年に完成し、以後毎年一定期間パシーで過ごし、音楽の夜会を催して多数の来客をもてなした。この手紙は邸宅が完成した年、1860年8月24日の日付を持つ。用紙サイズは19.5×25 cm、宛名(スティーヴンス)は冒頭「Mon cher Stevens」にのみ見られる。

これはスティーヴンス氏から自筆を求められたロッシーニの書き付けで、冒頭に「これがあなたの求める私の自筆です、ささやかではありますが！」とあり、上部余白にロッシーニのイニシ

ヤル「GR」の印章（空押し印）が押されている。スティーヴンスに関する詳細は不明で、イギリス人の来客の一人と思われる。



A “Mon cher Stevens”., Lettera autografa firmata di Gioachino Rossini, Passy ce 24 aout 1860. [Collezione privata di Akira Mizutani – Tokyo]

ロッシーニの署名入り書簡 不詳(判読不明)の友人宛 [1861年4月20日付]

解説

「Mon cher et célèbre ami」で始まるこの書簡は、文面が不詳の第三者による代筆で、署名のみロッシーニ自筆である。冒頭の日付（1861年4月20日）の筆跡は文面の筆跡とは異なり、紫色のインクで書かれた第四の筆跡もある（表面の3行目）。その末尾の判読不明の名前が、この手紙の受取人（宛名に当たる人物）と思われる。用紙サイズは20.5×26.8 cm。上部余白の印章（空押し印）はロッシーニのイニシャル「GR」と思われるが、前年の書簡のそれとは形状が異なる（スティーヴンス宛、1860年8月24日付の印章と比較されたい）。文章は表面の右半分と裏面の左半分に書かれているが、宛名や住所の記載はない。

これは15日に受け取った手紙が質問書への返書で、芸術を退廃 [デカダンス] に導くと言われる古い作品について自分は意見を述べる立場にないので返事が遅れたと前置きし、旋律的な音楽が芸術を墮落させたとの批判的論調に反論する形で、「あなたはクラリネットやフルートなどによって繰り返されるあなたの旋律を聞きながら、言葉に尽くせぬ満足をおぼえているはずです。[中略] 私たちの旋律が大衆の中に流布し、教養ある上流階級以外の人々にそれが知らされ、至る所でそれが複製されていることがどうして芸術を害することになるのか、私には理解できません。それがミダースの審判⁷なら、あなたは私を許すでしょう。私がうっかり、私は芸術に害を

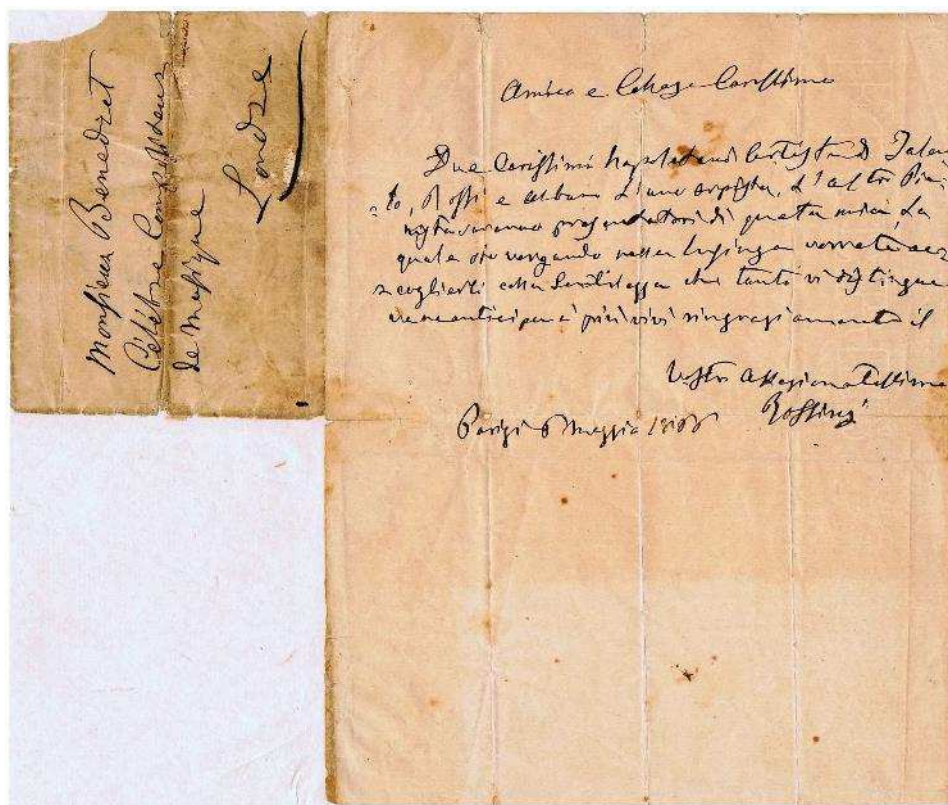
⁷ アポローンの竖琴よりもパーン（牧神）の素朴な笛の旋律が優れていると判定し、耳を「ロバの耳」にされたミダース王の故事にちなんだ言及。

ロッシーニの自筆書簡 [ユリウス・ベネディクト宛、1866年5月6日付]

解説

ロンドン在住のユリウス・ベネディクト (Julius Benedict, 1804-85) は、1804年にシュトゥットガルトで生まれ、ヴァイマルでフンメル、ドレスデンでヴェーバーに師事したドイツ人作曲家。1827年にナポリで最初のオペラを初演して成功せず、1834～35年のパリを経てロンドンに定住し、指揮者、作曲家として活躍した。1834～35年にパリでロッシーニと面識があったか否かは不明だが、60年代には交友があり、ロッシーニは1865年5月の手紙で出版社主アントーニオ・パチーニの娘ポール・ギラルを優秀なピアニストとして推薦し、ベネディクトに次にパリに来る予定の有無を尋ねている。

これは1年後の1866年5月6日付のベネディクト宛の書簡でサイズは21.8×26 cm (オリジナルは35 cmと思われる)。宛先はフランス語で「Monsieur Benedict / Célèbre Compositeur / de Musique / Londres」とあるが本文はイタリア語で書かれ、二人のナポリ人を才能ある音楽家として推薦している (名前は Rossi と Albano [または Albani] で、ロッシーニはハーピストとピアニストと記している)。ている。



A Monsieur [Julius] Benedict Lettera autografa firmata di Gioachino Rossini
Parigi 6 Maggio 1866. [Collezione privata di Akira Mizutani – Tokyo]

ロッシーニの自筆書簡 ジュゼッペ伯爵[ジュゼッペ・マッテーイ]宛、1866年8月1日付

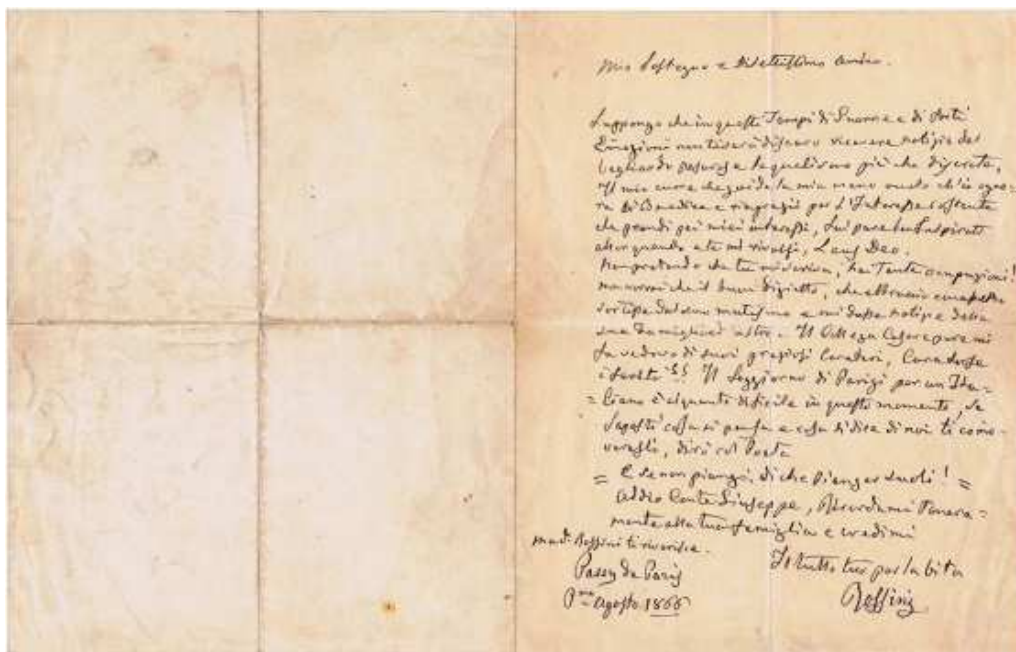
解説

晩年のロッシーニの胸中をうかがい知ることのできる手紙。用紙サイズは23.5×34.3 cm。宛先の記載がなく宛名も不明だが、文章の末尾に「Addio Conte Giuseppe (さらば、ジュゼッペ伯爵)」

とあり、ジュゼッペという名の伯爵に宛てたことが判る。晩年のロッシーニの友人で該当するのはジュゼッペ・マッテーイ (Giuseppe Mattei, 1811-96) 伯爵で、その兄チェーザレ (Cesare Mattei, 1809-96) を指すとおぼしき「Omega Cesare」も文中に書かれている。

マッテーイ兄弟はボローニャ有数の貴族で、マッテーイ宛の書簡で現存が確認できるのはこれが唯一と思われるが⁹、ロッシーニはボローニャのエージェントであるアンジェロ・ミニャーニや友人ガエターノ・ファービ宛の手紙にジュゼッペ・マッテーイへの伝言や挨拶を数多く記しており、1864年11月にはシャンパーニュ、翌65年冬には50本のボルドー・ワインを同伯爵に贈っている¹⁰。この手紙における親しげな調子や心情の吐露からも、ジュゼッペ・マッテーイ伯爵宛であるのは間違いないだろう。

興味深いのは、1866年8月1日付のこの手紙が当時の社会情勢を背景に書かれたことである。6月14日にプロイセン王国がオーストリア帝国に宣戦布告して普墺戦争が勃発、イタリア王国もプロイセンと同盟を結んで同月20日に参戦したが、イタリア軍は7月20日のリッサ海戦でオーストリアに大敗を喫していた。ロッシーニはそうした情勢をふまえ、「この戦争と強い動揺の時期に、君がペーザロの老翁 (vegliardo pesarese) の消息を知るのも不愉快ではないでしょう」と前置きし、「いま一人のイタリア人がパリに滞在することには、少なからぬ困難があります。もしも君が、人々が私たちのことをどう言い、どう思っているか知ったなら、さぞ心を乱されるでしょう。私は詩人と共にこう言いましょう。“これで君が泣かぬなら、君は何に泣くのか！” (se non piangi, di che pianger suoli!)」と結んでいる。これはダンテ『神曲』地獄篇第33歌からの引用である¹¹。これに先立ちロッシーニは戦争の機運を危惧し、「私は流血を好みません」とヴェネツィア在住のピアニスト、ペルッキニーに書き送っていた (6月1日付)。この戦争は短期間にオーストリア帝国の敗北に終わり、8月23日のプラハ条約を経て、ヴェネツィアを含むヴェネト地方がオーストリア帝国からイタリア王国に割譲されている。



A [Mio sostegno e dilettilissimo amico] [Conte Giuseppe], Lettera autografa firmata di Gioachino Rossini, Passy de Paris P^{ere} [sic] Agosto 1866. [Collezione privata di Akira Mizutani - Tokyo]

⁹ マッテーイ伯爵の子孫が保管している可能性があるが、これに関する情報は無く、研究者の探索の手が及んでいないようだ。

¹⁰ ガエターノ・ファービ宛、1864年11月8日付と1865年11月24日付。

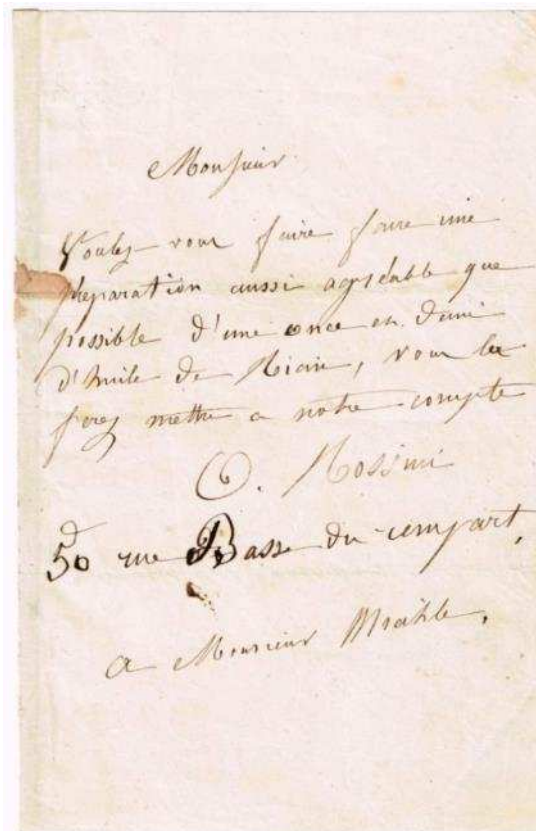
¹¹ 但し、ロッシーニはダンテの原文末尾の「？」を「！」と変えている。

オランブ・ロッシーニ[オランブ・ペリシエ]自筆書簡 ミアール氏宛 [日付なし。1855~58年]

解説

これはロッシーニの二人目の妻オランブ・ペリシエ (Olympe Pélissier, 1797-1878) が薬剤師ミアール氏 (Monsieur Miahle) に宛てた手紙である (署名は O. Rossini)。サイズは 20.5×13 cm。本来の用紙は横長 26×20.5 cm で、宛名と住所を記したと思われる左半分が失われている。日付は無いが、50 rue Basse-du-Rempart (バス=デュ=ランパール通り 50 番) の住所記載から 1855~58 年と判断する¹²。宛名ミアールはパリの高名な薬剤師ルイ・ミアール (Louis Miahle, 1807-86) であろう。ルイ・ミアールはパリの諸病院の薬剤師を務め、ミネラル・ウォーターや消化機能に関する研究論文を発表してパリの医学部の科学・薬学助教授となっていた (1867 年 7 月、ナポレオン 3 世の医学・薬学アカデミー会員に選ばれる)。

腸や消化器官の病気を患うロッシーニは妻オランブを通じてミアールに薬の処方依頼を頼っていたらしく、この手紙では「ひまし油 (L'huile de ricin)」(当時は下剤として使われた) を求めている——「できるだけ 1 オンス半のひまし油をご用意ください」。晩年のロッシーニのピアノ曲に〈ひまし油の小ワルツ (Petite valse [L'huile de Ricin])〉があり¹³、身近な薬の一つだったと思われる。



A Monsieur Miahle., Lettera autografa di Olympe Rossini [Olympe Pélissier], [Paris, s.d. (1855-58)] [Collezione privata di Akira Mizutani - Tokyo]

¹² ロッシーニ夫妻は 1855 年にパリに移り、58 年までバス=デュ=ランパール通り 52 番のアパートマンで生活した。建物は現存しないが、オランブの書いた 50 番も同じ建物と思われ、58 年に引っ越して以後この住所に住んでいない。

¹³ 「老いの過ち」第 7 巻《藁ぶき家のアルバム》第 6 曲。

付録: マヌエル・ガルシアのロンドン・デビューに関する書簡

マヌエル・ガルシア自筆書簡、ベネッリ宛 1819年6月15[16?]日付

解説

ロッシーニ《セビーリヤの理髪師》アルマヴィーヴァ伯爵の創唱歌手マヌエル・ガルシア (Manuel [del Pópulo Vicente Rodríguez] García, 1775-1832) は、マリブランとその妹ポリース、喉頭鏡の発明で知られる声楽教師マヌエル・ガルシア [二世] の父親としても知られる卓越した音楽家である。ロッシーニとガルシアの関係は、ガルシアが出演したロッシーニのナポリ・デビュー作《イングランド女王エリザベッタ》から始まる (1815年10月4日、サン・カルロ劇場初演)。翌1816年謝肉祭に予定された新作《セビーリヤの理髪師》の成功を確実なものとするため、セビーリヤ出身のガルシアに出演を求めたのもロッシーニ自身であった。

《セビーリヤの理髪師》の初演を終えたロッシーニはナポリに戻ったが、ガルシアはイタリアを去り、ロッシーニとの関係もここでいったん途切れてしまう。ガルシアは1816年の夏と初秋をロンドンで過ごし (但し、オペラには出演せず)、11月頃パリに戻ると12月に数回のコンサートに出演した。そして翌1817年3月に王立イタリア劇場の《コジ・ファン・トゥッテ》に出演、5月22日には自作《バグダッドのカリフ》(*Il califfo di Bagdad*) (1813年9月30日ナポリのフォンド劇場初演) のフランス初演を同劇場で行い、歌手・作曲家として高い評価を得た。12月にはオペラ・コミック座でフランス語台本によるガルシア初のオペラ・コミック《なりゆき王子》(*La Prince d'occasion*) を初演し、大成功を収めた。続いて1818年1月、ロンドン・デビューすべくイギリスに渡り¹、3月10日にロッシーニの《セビーリヤの理髪師》イギリス初演でロンドン・デビューして大成功を収め²、翌1819年8月までこの地にとどまり、ロッシーニ、モーツァルト、チマローザのオペラに出演している (《セビーリヤの理髪師》《イングランド女王エリザベッタ》《アルジェのイタリア女》《ティートの慈悲》《コジ・ファン・トゥッテ》《魔笛》[イタリア語版]、《秘密の結婚》)。

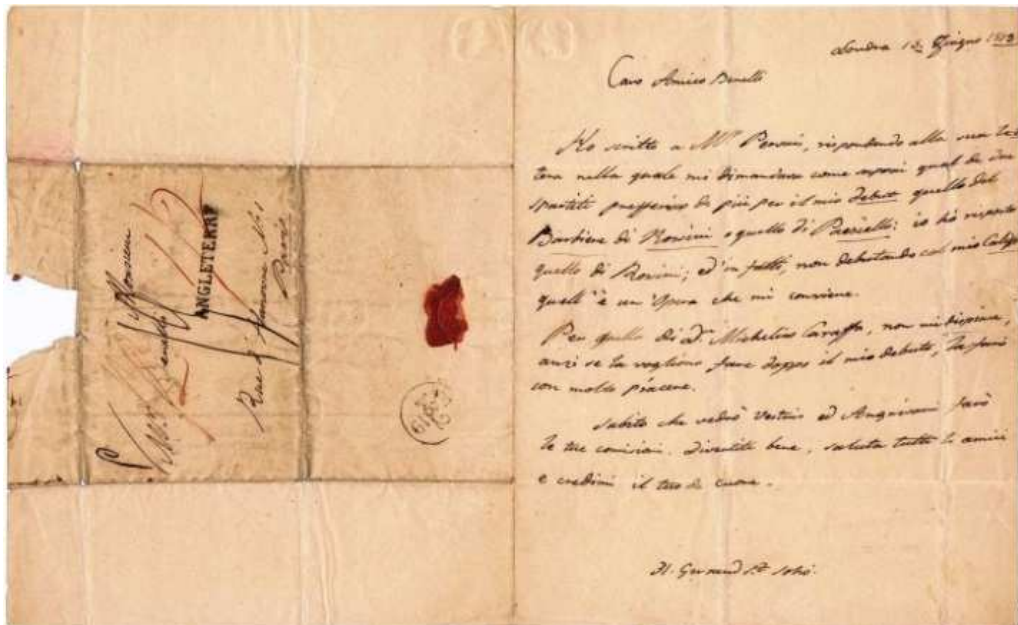
これはガルシアが1819年6月15日または16日³にパリの王立イタリア劇場エージェント兼マネージャーのジョーヴァン [ジョヴァンニ]・バッティスタ・ベネッリ (Giovanni Battista Benelli, 1773-1857) に送った書簡である。ベネッリは1816年から王立イタリア劇場で働き、1819年にはロンドンのキングズ劇場興行師ジョン・エーバース (John Ebers, 1785頃-1830頃) に歌手や作曲家を斡旋する仲介人を務めていた⁴。ガルシアはこの手紙の中でパリ・オペラ座の音楽監督ルイ=リュク・ロワゾー・ペルシュイス (Louis-Luc Loiseau Persuis, 1769-1819) の問い……ロッシーニとパイジエッロのどちらの《セビーリヤの理髪師》でロンドン・デビューしたか?……に対し、次のように答えている。

私はペルシュイス氏に、彼が手紙の中で私に問うた、君もお分かりだろうが私がデビューするに当たってロッシーニの理髪師とパイジエッロのそれぞれの二つの楽譜のどちらが好きかを書き送りました。私はロッシーニの理髪師と答えましたが、それは私にうってつけのオペラ《[バグダッドの]カリフ》でデビューできなかったからです。

Ho scritto a Mr. Persuis, rispondendo alla sua lettera nella quale mi dimandava come saprai qual de due spartiti preferisco de più per il mio debut quella del Barbiere di Rossini o quello di Paisiello: io ho risposto quello di Rossini: ed' in fatti, non debuttando col mio Califfo quell' è un' Opera che mi conviene.

続いて作曲家ミケーレ・カラーファ (Michele Carafa, 1787-1872) の名前をミケリーノ・カラッファ (Michelino Caraffa) と記しているが、ガルシアはロッシーニと出会う前にカラーファの二つのオペラの初演に参加し、交友があった⁵。またヴェストリス (ルシア・エリザベス・ヴェストリス Lucia Elizabeth Vestris, 1797-1856. コントラルト) とアングリザーニ (Carlo Angrisani, 1760?-バス歌手) に会ったらずぐに君の依頼を伝えると記し、両者と王立イタリア劇場の仲介人を務めたことが判る。

用紙サイズは22.5×36.5 cm。上部の印章（空押し印）の図柄や文字は判読できない。中央左に赤い封蝋が半分残っているが、そこに押された印璽も判読不明である。ガルシアの署名はどこにも無いが、他の自筆署名入り書簡との筆跡照合からマヌエル・ガルシアの自筆書簡と認定されている。



Lettera autografa di Manuel García sul suo debutto a Londra (A [Giovann Battista] Benelli [Paris] ,15 [16?] Maggio 1819. London) [Collezione privata di Akira Mizutani – Tokyo]

¹ 1月30日付『タイムズ (The Times)』紙に到着が報じられた。

² 最初の2か月間に22回上演。

³ 書簡の数字が5か6か判然としないため、このような表記とした。

⁴ ベネリは1820年にキングズ劇場の興業師となって以降ロッシェーニをロンドンに招くべく働きかけたが、1824年まで実現しなかった。

⁵ 《西の帆船 (Il vascello d'occidente)》(1814年ナポリのフォンド劇場初演)と《正された嫉妬 (La gelosia corretta)》(1815年ナポリのフィオレンティーニ劇場初演)。